

バリ島の一周間

(インドネシアだより5)

菊池 徹

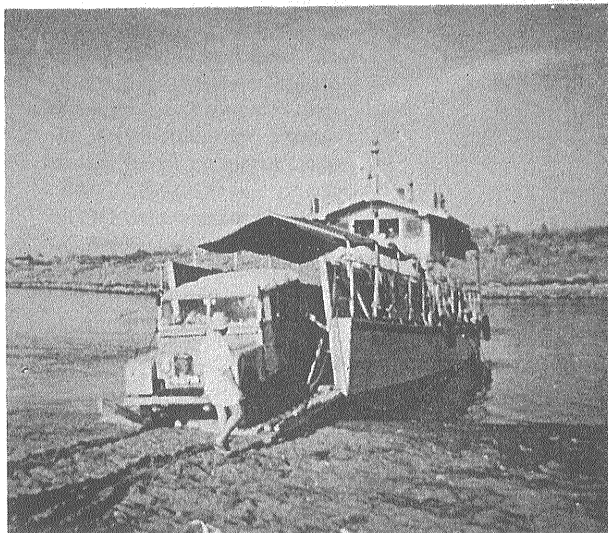
西部ジャワの「バンドン」と同じように 東部ジャワの古都「マラン」もまた 美しく 静かな高原のまちとして有名である。 そのマランの西北 約20km 標高約1,200m に「バト」と呼ばれる避暑地がある。 避暑地といえ いかにもぜいたくに聞こえるが ジャワの生活に これらの避暑地がどれほど重要な役目をはたしているかは そこで生活したものでないと理解できない。 とにかく 私たちは めいめい1カ月あまりの酷暑地獄にも似たフィールドワークを終えて ここ「バト」にて再会 2日間の滞在ですっかり頭を冷やしたのだ。

1961年3月26日「バト」のホテル・サントソーをあとにした駒谷氏と私は 運転手のスカンダをつれて 一路バリ島へとくるまを走らせていた。 くるまは フィールドで使用した英国製ジープ「ランドロバー」・3人共着ているものはフィールド着であり 顔は日焼けしてひどく黒い。 だれが見ても これが 日本人コロンボプラン専門家たちの休暇旅行 しかも名にしおう世界の観光地バリ島への旅と見てとれない。

バリ島への旅は 普通ジャカルタあるいわスラバヤから飛行機でとび立つ。 そして またたく間にデンパサールの飛行場に スーツケースを下げて降り立つのである。 ところが 私たちは フィールドワークの延長に1週間の休暇をとって フィールド用のくるまをバリ島へ乗り入れようという考えだ。

ジャワ東部のハイウェイはすばらしい。 けっして広い道でもなく舗装も安っぽい。 だが直線の多いこと路面に信用がおける点でやはり第一級の道路といつてよいだろう。 私たちのガタぐるまでも しばしば時速100kmを越えてつっ走っていた。 何といつても 共に走っているくるまの少ないことは 日本の近郊では望み薄いはなしである。 左にマズラ海峡のなめらかな海面をながめ 右にアルゴプロ山(3,088m)やラウン山(3,332m)など 日本の富士山にとてもよく似た姿の火山を見ながら くるまはカンポン(部落)からカンポンへと走りつづけ 夕刻 バリへの渡航場バニユワングにたどりつく。

バニユワングはジャワ島東端 海上はるかにバリ島を望む小さな魚港だ。 まず波止場に行って バリ行きのフェリーボートの便を聞く。 1日2〜3往復しているそうだが きょうはもう既に終わり とにかく 明朝まで待てという。 インドネシア生活既に半年を経た私たちは 「トゥング サジャ(待つだけさ)」ということばもあまり抵抗なしにできるようになっていた。 フィールドワーク中から調子のよくなかったランドロバーのエンジンが ここにきていよいよだめ とはいえ 部品屋があるわけでもなく しかたなしに運転手のスカンダは汗だくになって ディストリビューターとスターターを分解修理していた。

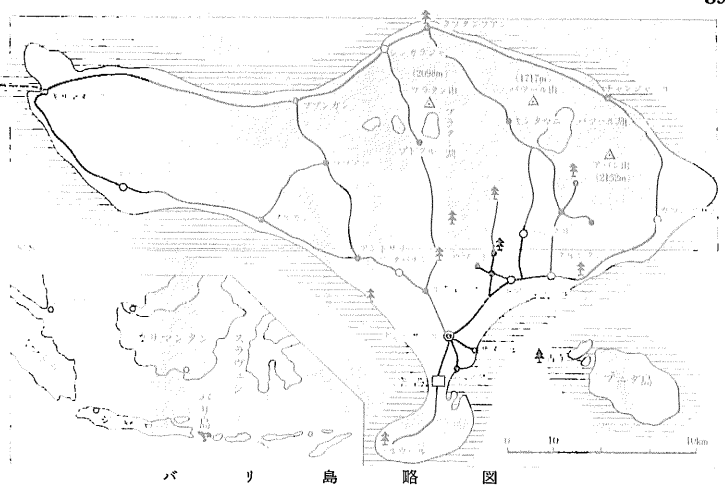


バリ島の玄関ギリマヌックに上陸用舟艇で到着した一行のランドロバー(英国製ジープ)



バリ島農村の風景

宿の名は「バリ・アダンジャナ」アダンジャとは「よく似た」の意だから、日本流に言えば「バリ旅館」とでもいうところ、さすがに門のつくりや建物もバリの古寺に模してある。この宿に案内したまちの子供が「バリでのホテルは予約したのか？」と聞く「ブルム(まだだ)」と答えると「それではサヤ(私)が電話しておいてやるから電話料をよこせ」という。一応彼を信じて電話をかけさせ、デンパサールの安宿の一室を予約する。



宿の予約といえばインドネシアでの旅行はホテルをとることがとても大変なのだ。バンドンの私たちの泊まっている「ホームン」という一級ホテルなど1カ月ぐらい前でも断られることが多い。ジャカルタスマランスラバンジョクジャ等すべてホテルは大ふつ底だ。ところが私たちは今まで一度もこれらのホテルを予約したことがない。というのは何日にそこへ行くかを決定的に予定できないからだ。仕方なくいつも行き当たりばったりでやって来る。たいていはりっぱなホテルは門前ばらいだ。やむなく近くの小さなまちまでとばして、そのロスメン(木賃宿)に泊まるのだ。

インドネシアには「ホテル」というのと「ロスメン」というの2種類ある。ホテルというのはたいてい食事つきで1泊50〜300ルピヤ、ロスメンは食事なしで5〜30ルピヤであった。私たちはロスメンに泊まってまちの食堂へめしを食べにでかけたことが多い。バリでもそのつもりでいたら例の子供が「それは不可

能だ」という。しかたなく電話をかけさせた次第。さてあけて3月27日、いよいよバリ島へのりこむ日、早朝に起きて船会社へ交渉にでかける。幸運にも相客のくるまがあって9時ごろ砂浜からランドローバーを米軍払い下げの上陸用舟艇に乗せてバリ海峡へと乗り出す。2台のくるまで1そうの舟をチャーターするのだからかなり高価だ。たしか500ルピヤもとられたと記憶している。おまけにそれらの事務手続きをしてくれた不思議な男が1人いて、私たちといっしょに乗ってきた。そして「バリ島側すなわちギリマヌックには税関があってかなり面倒だが私がついておれば大丈夫だ」という。外国人とみるとそのような世話をやいているてあいだ。いづれチップをやらねばなるまい。

「パト」で冷やした頭も前夜のバニウワングで又あたためられ、暑い太陽の照りつける波止場での乗船作業に、いささかバテていたところ、さすがに海上の風はさわやかで、去り行くジャワと近づくバリをながめながら、皆

BALI-HOTEL
NATIONAL HOTEL AND TOURIST CORPORATION LIMITED
INDONESIA

Kursi/Room No. 35-24 No. 34925
NAMA/NOME 32. M. A. Kuch
Other/Other 101 336.00
Akan/Will 136.00

TOTAL PER DAY No. 473.00
Time/Time Arrived on 27-3-57
Departing/Departing date 28-3-57
TINGGAL/STAY 2 DIARI/AYS

Pembayaran dan/Room and lodging 2 x Rp. 473.00 No. 473.00
Makanan/Meals Rp. 100.00
Makanan/Meals Rp. 100.00
Minuman/Beverages Rp. 100.00

Pajak/Provisional (tentatif) tax Rp. 0.00
Pajak/Provisional (tentatif) tax Rp. 0.00

LUNAS/PAYED

BILAN PEMBAYARAN TOTAL HOTEL/BILL
Rp. 473.00
Rp. 473.00
Rp. 473.00

Disamping/dan/In addition to the above
Rp. 0.00
Rp. 0.00
Rp. 0.00

MANAHER BALI-HOTEL
BALI-HOTEL DENPASAR
BEACH-HOTEL SANUR
BATUBURU LTD.



世にも有名なバリ・ホテルの領収書

バリにあるいく種類かのダンスの内、これはグチャック・ダンス、一名モンキーダンスといい、男性合唱が美しい。



パリには彫刻家が多い ウブッド近くの有名な彫刻店の職人たち

悦に入っていた。ギリマヌック それは海よりのパリの表玄関である。だが なんとお粗末な玄関なのだろう。外国人のよいお客は その大部分が空路入島するので ここには りっぱな玄関は必要でないと考えているのだろう。私たちのくるまも砂浜から上陸する。そのために「とも」が平たくて開閉できる上陸用舟艇が便利なのだ。なるほど さっきの男が言ったように一応税関みたいなものがある 島から出入りするもの持ち物を調べている。

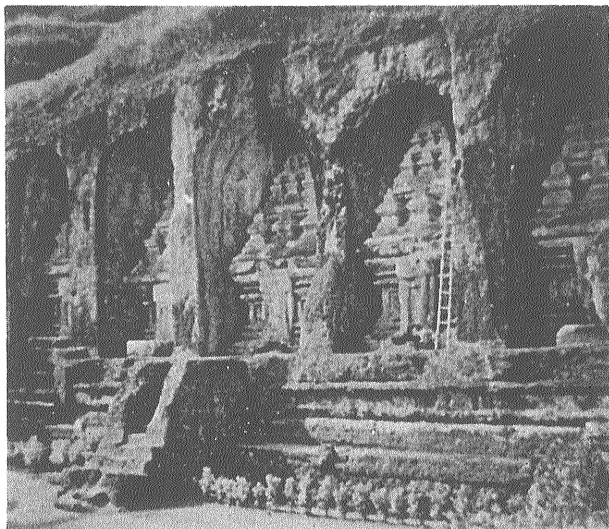
考えてみると その目的が2つある。1つは いわゆる経済統制だ。終戦直後 日本各地でも行なわれていたヤミ物資の取り締まりと全く同じで こめの多いパリからジャワへのかつぎ屋が横行しているからだ。

他の1つは パリは観光地として外国人でも 空港はかなり自由に入出国させている。そのため悪質な密輸商は外国からジャカルタを素通りし パリ空港から出入国するという手があるわけだから ここに関所が1つ

設けてあるというわけだ。とは言い 私たちは何のやましいところもないし 急ぐ旅でもない。ノンビリと構えていたら例の男がきて 「自分がうまく話をつけてきたから ここから出てよい」と言って 裏口とおぼしき間道へくるまを導き自由の身にしてくれた。200ルピヤを要求したが 私たちから頼んだわけではなく 自分1人で勝手にやってくれたことなので 始めは1ルピヤもやらないつもりだったが また帰り道もあることなので100ルピヤを渡す。「テレマカシ(有り難う)」と言って去ったが 聞けば もとここのポリスだった男だそう。道理で顔のきくわけだ。

ギリマヌックをあとにくるまは パリ島内を走り出した。道路工事が目立つ かなり良い道路ではあるが もっと良い舗装にしようというのだろうか？ 工夫は大部分が女である。パリは女のかせぐ島と聞いてきたが まさにそのとおり 大きな 一かかえもあるような石塊や ざるに盛った石を頭上に乗せて運んでいるもの それをならしているもの ほとんどが女である。男はとさがすと 数少ないブルトラーやローラーの運転をしたり ヤシの葉を立てて作った日陰でコンコンと石を割ったりしていた。いったい 大多数の男共はどこで何をしているのだろう。

女が頭上にものを乗せて歩くのは 日本でも大島などで見られるが 東部ジャワ マズラ島 パリ島では珍しくない。ただどこでも共通な点は 女性だけにある習慣で男にはみられない。ハイヒールでチョコチョコ歩く女性の姿にエロティシズムを感じた欧米人と同じように 頭上にものを乗せて歩く女性の物腰には 一種たならぬ魅力のあるものだ。女たちもそれを十分に意識しているし 男たちも結構楽しんでる。もちろん私



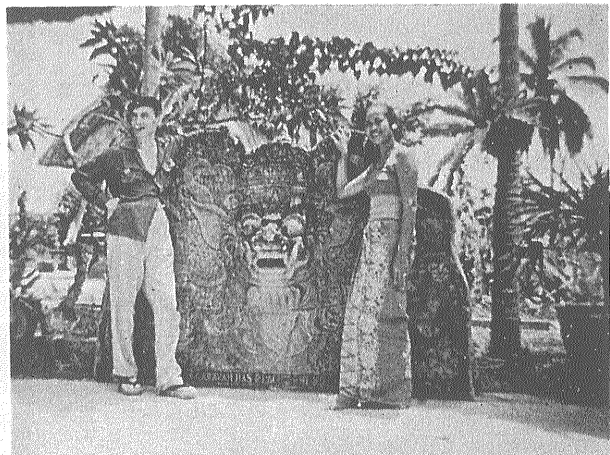
古代仏跡の1つ なかなか規模が大きい



古 寺

私たち「男たち」の仲間に入れてもらうことにした。

ジャワからパリにやってきた人たちは 水田が非常に整然としているのには驚かされる。 かんがいもきわめて完備しており 稲田の区画も整然としている。 あたかも日本の四国あたりのいなかをドライブしている感がある。 そもそもインドネシアの農業は あれだけよく開かれたジャワでさえも 日本の農業と比べるとかなり幼稚であり 雑然としている。 だがここパリにくと仲々よく整っており そしてかなり裕福に見受けられる



アメリカ人画家ブランコ氏は 美しいダンサーの奥さんをもって パリに永住を決めた 日本から買ってきた八ツ折れゾーリをはいていた

とにかく くるまは約2時間のドライブでデンパサールに乗り込んだ。 まず 予約してあった三級ホテルにくるまを止め「夕方までに連絡しなければ泊まらないから」と告げ チップを少しやって再びまちへ 何はともあれ世界のパリにきたのだから 第一級のホテルに泊まるのではないかと 有名な「パリホテル」へ乗りつける受け付けに現われた ほこりだらけの作業服の男たちをうさんくさそうに見ていた係は 「2晩だけなら小さいへやがある」という。 OKとばかり ジープから荷物を降ろし 3人で1へやに入る。

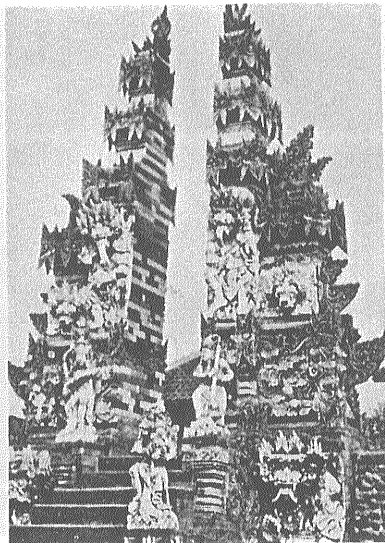
運転手のスカンダは 自分だけ他の所に泊まりたいという。 そんな古い植民地的風習はやめて 私たちといっしょに泊まろうではないか このパリホテルだって元はオランダのものかも知れないが 今では明らかにインドネシア人のものであり インドネシア人の運転手が泊まっても何も不思議はない……こうなだめて同宿する。 そもそも 古い過去はもちろんのこと 今でもそれが地質調査所から派遣された調査隊の場合でさえも 白人たちなら インドネシア人の運転手には小銭を与えて別の

最低の宿に追いやってしまうのが普通である。 だが日本人には仲々それができないばかりでなく かえってそのような習慣に大きな抵抗を感じ 今までもいっしょに泊まってきた。 そのように私たちの気持をよく理解しているはずのスカンダでさえも さすが パリホテルとなるとやはりいくらか気おくれすると見える。

旅行には計画がつきものである。 プランニングの上手下手は その旅行のすばらしさに大いに関係する。 とりあえず私たちは「ニツール」と呼ばれる国営旅行社に飛び込んだ。 このニツール (NITOUR) という名は National International Tourist Bureau の略であるがこれは もともとオランダ人の手で経営されていたもので その当時は Netherland and Indonesian Tourist Bureau という名前で 略して同じく“NITOUR”と呼んでいたものである。 すなわち インドネシア国営会社になってからの名前を以前からの略称に合わせて作ったものである。 「ニツール」の係員の説明を聞いて



「エレファント・ケープ」というから象でもかっているのかと思ったら 古代人穴居の入口にごらんのように彫刻したもの 石は石灰質凝灰岩



古寺の門 (北パリにて)

明日からのプランを立て ガイドの世話などを約してま
ちをぶらつきに出る。

まちを探訪するにかけては 同行の駒谷氏にいつもリ
ードされている私である。 私とて探訪癖がないわけ
ではないが 彼の情熱は何といってもものすごい。 とは
いえ カンカン照りの午後のまちは 例によって静かな
夜ふけのようである。 商店は閉じているし 歩行者も
少なく 軒下にウツロな目をしてたたずんでいる人々の
姿を見るのは インドネシア中どこへ行っても大した変
りはない。 結局 つまらないということになり ホテル
に引き上げてひるねすることにする。



岬寺の水廻の花咲く池 (東部バリ)

ひるねといえば これまた日本流に考えると何たるな
まけ者よとおしかりを受けそうだが これがまた この
地の生活には必要欠くべからざることで フィールド調
査中とはもかくとして バンドンのような涼しい所で
の生活でも よくひるねを楽しんだものだった。

あまり気のないのしない運転手のスカンダをも誘って
ホテルの食堂で晩飯を食べた。 まちの食堂で食べるの
と異なり いわゆる欧米式に固苦しいマナーが必要であ
る。 ところが私たちは 既にご存知のとおり調査着姿
の一行だ。 でも 心臓の強さにかけてはけっして人に
ひけをとらない者ばかりだから何のことはない。 始め
はオドオドしていたスカンダも すぐ大いばりではばくつ
き出した。 フォークの持ち方や ナイフの使い方など
を教えてやっている私たち作業服姿の不礼者たちを 白
人の観光客たちは どう思って見ていただろうかと思
うと仲々おもしろい。

ここの「ポン引き」は他の所のように女を世話しよう
というのではない。 ただ「どこそこで踊りをしているか
ら見に行かないか？」という いとも高級な奴であ
る。 踊りの見物は バリ島観光のうちで最も重要なも
のであり 既に「ニツール」の打ち合わせで 後日参観
することになってはいたが この種「ポン引き」につ
いて行くのもまた一興と 彼を私たちのくるまに同乗さ
せて近くのカンボン(部落)へとでかけた。 日本でい
えば鎮守の森といったような所 高いヤシの木に囲まれた
広場に簡単なテントが張ってあり その周囲には既に何
百人もの女子供が集まっていた。 今夜の踊りは「ジョ
ケット」と名付けられたもので いくつかの種類のうち
有名なものの一つである。 しかも庶民的ふんいきに富
み 現在でも大衆の中にとけ込んでいるものだ。

夜 ホテルの前のベランダで休んでいると 何人もの
「ポン引き」がやってきた。 「ポン引き」といっても

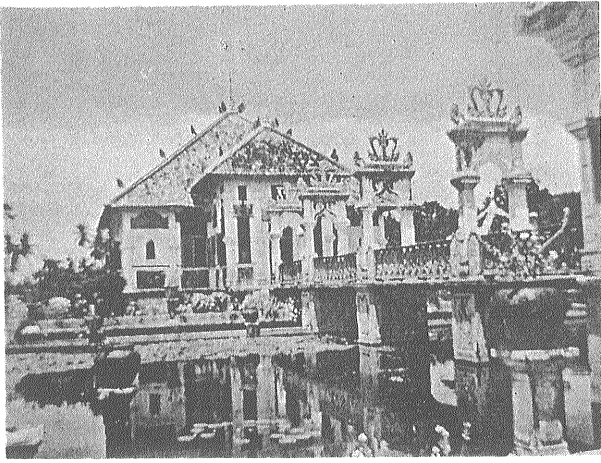
その踊りの中心には 1人の美人ダンサーでその女が
ガメラ音楽(インドネシア 古来のもので 主として
打楽器から成り 時に弦楽器や管楽器も加わる)に合わ



これはセメントで造ったもの 色はあ
でやかであるが 余り趣味はよくない



バサールの女たち 昔は上半身裸体で有名であったが 今では
政令によりブラジャーを着用している



脚 寺 の 一 部

せ からだをくねらせて踊りながら その相手役の男性を彼女が自分の意志で観衆の中から選ぶのである。彼女の扇子でタッチされた男は 見物人たちの歓声に送られて中央の踊り場へと出て 美人ダンサーと相対し 彼女をリードするがごとく 又彼女を困らせるがごとく踊りまくる。だが けっして欧米の社交ダンスなどのごとく 彼女のからだにふれることは許されない。その間ガメラ音楽はやけにガチャガチャ鳴り さかんにムードをかきたてるのだ。駒谷氏と私は ただ黙ってその何となく土人くさい そしてショーに似た完成されているのか 未完成なのかわからない踊りに見とれて夜のふけるのも忘れていた。

次の日 3月28日「ニツール」のガイドの案内で デンパサル付近の古寺巡礼ということに相成った。もともと寺社仏閣にはなんの興味もないし 歴史に対してもなんらの知識も持たない私は かつてローマに遊んだ時 非常に退屈を覚えて さっさと逃げ出し「君よ知るや南の国」へとドライブを楽しんだことを思い出した。

ここバリ島でも ていねいに見て歩けば 何週間もかかるであろうと思われる程たくさん寺があり それぞれ歴史に関係を持ち芸術品であるとのことである。

バリの観光は 古寺と木彫と絵画と踊りとにある。古寺がつまらなければ 木彫と絵画にでも楽しみを見出さなければ 何のためにやってきたのか その価値がともも少なくなる。ところがこれ又 何の知識も趣味も持ち合わさないので困ったものだ。何軒もあるみやげ物屋 その全部が木彫と絵画で店を飾っている。わかったよう顔をして黙ってながめ「フーン」といった工合にして出てくるだけだ。金はかなり持っており 1万ルピヤでも 2万ルピヤでも買い物しようと思うのだが この芸術ではね……本当をいって デンパサルにナイトクラブが無かったのが 全く不幸中の幸いであったような気がする。

デンパサルの北方約20km ウブッドという小さなカンボン（部落）に米人画家が住みついており かなり有名なので 彼を訪れてみる。名は「ブランコ」数年前東京の銀座でも個展を開いたことがあり 日本でも名を知られた青年画家の1人であるとのことだ。小高い丘の上 たぶん小さい古寺だったものを買い取り それを改造して住み込み さらに付近の凝灰岩を利用したブロックでりっぱなアトリエを建て仕事に専念していた。美しい奥さんは もとバリの一流の踊り子とのこと 私たちにもポーズをとってくれた。かわいい女の子はこの踊り子にするのだそうだ。画家にはずいぶん変わった人もいようだが ブランコ氏などもかなり変わった人の1人だろう。金は アメリカから送ってくるらしい。絵は売れても売れなくても かなり高い値だとの



パ サ ー ル の 水 が め 店



闘 鶏 まさに とびかからんとし 見物人はカタズをのんで 見まもっている



色とりどりの美しいおだんごを頭上にのせて
お寺へお供えをする (バリのお祭)

ことだ。

昼食をとったのは たぶん昔の豪族か 王侯の家と思われる家で ホテルではないが 頼めば泊めてもくれるし 食事もできる。中庭に建てた「あずまや」に用意されたテーブルにつき 何人かのボーイにかしずかれて 西欧式にナイフ フォークで食べるインドネシア料理は何となく植民地の役人になったみたいでおもはゆいものであった。東京にも 家の造りをお城のようにし お客には大名の着物を着せ 大きな床にすわらせて 古式ゆかしい着物を着た美女が食ぜんにかしずく旅館があると聞いたが お客の気持はこのウブッドでのそれと似たようなものだろう。

デンパサール付近を1日で切り上げた一行は 3月29日 東部バリへ行くまを走らせ その夜は高原のカンボン(部落)キンタマニに泊まった。東部バリにも ギアンジャール クルンクン カランアセム等 かなりのまちがある。どこへ行っても人の多いのは ジャワと変りない。人口密度は世界でも屈指である。いずれもきたないまちだ。あちらこちらのパサールを見て歩く。

パサールというのは^{いち}市のことで 常設のものもあれば 日を決めて開かれるものもある。いずれもきわめて雑然としていて全くきたない。農家が持ち込む農産物まちで仕入れてきた雑貨などが雑然と並んでいる。ここでは 時には物々交換も可能である。主として婦人連のいこいの場であり 社交場であり そして時間つぶしの場である。だが バリのパサールで ジャワのそれと異なった点は 私たち外人観光客がブラブラ歩いて カメラを向けても 全く気にもかけない点だ。ジャワでは こんな所でカメラを出そうものなら それこそ黒山の人だかり われ先にと写してくれと集まってくる。

さすが世界の観光地バリでは こんなことはない。時には カメラを向けるといやな顔をする人たちもいるくらいだ。バリの東端に岬寺というのがあるヒンズー教(古い仏教の一派)の古寺であるが 海に面した小高い丘の中腹にあって 水面一面に咲くハスの花が美しく 日本の仏教の寺とはおよそかけ離れた建物などともどこかである。バリ島といってもここまで来れば 観光客などおらず だれもいない静かな古寺が私たちを待っていた。

バリには闘鶏というのがある。一般大衆にとけ込んだ遊びで かなり広く行なわれている。だれがその責任者になるのかよく知らないが 10人~100人の男たちが集まって円形をつくり その中へお互の愛鶏を2羽はなす。各が観衆であり そして鶏の持ち主である。すべておんどりであり めんどりは使わない。けづめの所に細いとぎすましたナイフを結びつけられ 互に血を見て さらにエキサイトし闘志をもやす。突き所が悪ければ 一突きで参ってしまう。バタバタあえぎながら土に倒れる相手を見て 勝った方は意気揚々だ。負けた鶏はもちろん 勝った鶏でもあまりにも傷ついている場合には その場でパッサリ首を切られ食肉にまわされる。いずれにしても かけ値はたいしたことなく せいぜい5~10ルピヤづつを出し合っているようだ。

東部バリを見物した私たちは夕日の沈むころ高原のカンボン(部落)キンタマニへ向かって全速力でくるまを走らせていた。日本人にはやや面白い名まえのキンタマニは バツール火山の外輪山の上であり 標高1,500m かなり寒い。インドネシアの生活にとって 時々このように高い所へやって来て 頭を冷やすのは非常によいことである。デンパサールではホテルのへやがとれないというのに キンタマニでは私たちのほかに 中国人夫妻が一組だけで いかにも静かで快適であった。

次の日北海岸へ出て クブタンブアンを経て かつてのバリの首都シンガラジャを見物に行く。例にもれずきたないまちだが 3月末はどこでもお寺の祭りで ここでもいくつかの行例を見た。ガメラン楽器を先頭に着飾った人々の行例 その大部分は女性で 頭上にたくさんのお供え物を乗せている。ほとんどが色とりどりのだんごだ。

そしてその夜 ブラタン湖の湖畔ブドグルで 湖畔の宿に泊まる。客は私たちだけ。宿の主人のすすめで 私たちのみで ジョケットダンスのチーム30人位を呼んで 王侯気分を味わったことは 一生忘れられないであろう。

(筆者は 飯塚部 金属課)